

國學院大學學術情報リポジトリ

林陸朗先生の追憶

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 靖民, Suzuki, Yasutami メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000431

林陸朗先生の追憶

鈴木 靖民

林陸朗先生は二〇一七年二月一七日、インフルエンザに罹

り肺炎を起こして昇天された。享年九一であった。林先生は国史学会会長を長年にわたって務められ、学会の隆盛のために尽力された。先生は銀行に勤務されたご父君の任地、富山市に一九二五年八月二日、お生まれになられた。やがて東京の中野に移り住んで日本基督教団の中野教会の幼稚園に在籍した時、ご家族揃って入信されたと同っている。一九四三年、青山学院中等部（当時）から國學院大學（師範部、のち専門部）に進学された。途中徴兵されて群馬県の帝國陸軍高崎連隊に属し、大田にあった中島飛行機場で軍務に従ったが、戦後復学して一九四九年、同大學学部を卒業された。同期に少し年上の考古学の小出義治氏がおられた。在学中は日本古代史を専門として学び、岩橋小彌太先生の指導を受けられるほか、講師として出講していた坂本太郎先生や考古学の大場磐雄先生の薫陶を受けられた。

卒業後、同大學史学研究室の助手となられた。助手の職務の一端として、現役の教員や卒業生を中心に組織されてきた

国史学会の運営にも従事された。特に先生は『国史学』の出版に当たり、当時入手しにくい紙を担いで印刷費の安価で済む横浜・笹下（現在港南区）の刑務所まで運んだ苦勞をしばしば述懐されていた。その後、大學では非常勤講師としての勤務が長く続き、傍ら母校の後身、青山学院高等部や成城大學にも出講しておられた。

私は一九六〇年、文学部史学科に入学したが、四年生の時、古代の主要な出来事や人物に関する史料を集めた孔版印刷のテキストを使った先生の演習を受講した。当時、演習は今日のような学生が選択するゼミナール形式でなく、古代から幕末までの時代ごとに設けられた史料講読であり、史学科学生全員の必修科目になっていた。ほかに先生は日本特殊史と題する近世の地方（農村）史料の授業も担当しておられ、私も教わった。地方史料を扱うのは岩橋先生のお勧めであったとお聞きした憶えがある。一九六五年、四十歳の時、先生は専任講師となり、一年後に助教授、四年後の六九年に教授に昇任された。

私は授業以外に史学会という学生のサークルの『続日本紀』を講読する古代史部会に入り、そこで林先生をはじめ助手の渡辺直彦氏、文化財保護委員会の山本信吉氏などの先輩に厳しい指導を受けた。というよりも先輩たちが史料解釈をめぐって難解な議論を繰り返したが、初心者のはそれをそ

ばで聞いているだけだった。一年生の夏休み、猪苗代湖畔の合宿を機に、林先生の警咳に接しより親しい間柄になるとができた。先生はまだ三十代半ばであった。以来、半世紀以上にわたって先生に何かと厚誼頂いたのである。私は学部卒業論文を作成するに当たって非常勤であった先生に指導教員をお願いした。その後、大学院生の時、岩橋、坂本両先生に師事した。林先生は大学院を担当しておられなかったが、その頃から先生が助手を勤めた時の卒業生の集まりに誘われたり、また少人数の『平安遺文』の研究会を通したりして、上記の先輩のほか、今江廣道氏や池永二郎氏などもお近づきになった。ついでにいえば、大學外の学会などに出席した折に、大學の大先輩で学界での活動の目覚ましかつた上田正昭氏、岡田精司氏を紹介して下さり、また渋谷の喫茶店で偶然お会いした直木孝次郎氏に引き合わせて頂いたこともあった。私が何編か公表し始めたばかりの新羅との外交の論文に対して、先生は紋切り型の史料中心の叙述スタイルや問題点を批評し、適切な示唆を与えて下さった。そこで私は外交の推移の追究から脱却して、奈良時代の外交の意識あるいは儀礼についての文章を草した。振り返ってみると、これが私の日本から東アジア全体に視野を広げる対外関係史研究の大きな契機になったと思われる。

一九七〇年、林先生は『上代政治社会の研究』により文学

博士の学位を取得された。奈良・平安時代の政治、政争、貴族社会などを内容とする論文集であった。主査は学部以来教員を受けられた岩橋先生であった。ちなみに当時、岩橋先生は『上代官職制度の研究』以下の上代何々シリーズや何々叢説シリーズ、『日本の国号』などを相次いで吉川弘文館などから出版されたが、それらは林先生に率いられて今江氏、山本氏、私などが編集、校正などをお手伝いしたものであった（『國學院雜誌』一〇八号の追悼号に載せられた岩橋先生の自叙伝の掲載に当たっても、生前に原稿をお預かりしていた私と林先生が関わった）。

林先生は大學で専任教員となられて以後、学部で古代史の基本史料とされる『続日本紀』を主に講読し、大学院を担当されてからも一貫して『続日本紀』をテキストとして取り扱われたと聞く。それが後に掲げる『続日本紀』の全巻にわたる注釈書の刊行となって実を結んだ。先生は日本古代史、近世史を講じられたので、古代、近世を専攻する学生が膝下に集まり、有為の人材を社会に送り出すとともに多くの研究者を育てられた。またご自身の大學外での研究活動では、長年山中裕氏、黒板伸夫氏、山本信吉氏などと平安時代政治史の研究会を続けておられたと記憶する。先生は一九九六年まで勤め上げて、つががなく定年退職を迎えられ、國學院大學名誉教授の称号を授けられた。

林先生の國學院大學、とりわけ史学科にとつての最も大きな功績は、史学科教員の陣容を整え、教育、研究の体制を充実させたことであると思われる。林先生が専任教員になるまで日本史や外国史の教授、講師は、高名な先生たちが綺羅星のごとく並んでおられた。だが東京大学史料編纂所などを退職後に就いた國學院大學卒業の先生が多くを占め、一九六〇〜七〇年代初め頃は教授の職にあつても大學内や他の学校の業務を兼ねるか、非常勤の講師が中枢にあるのが実情であつた。中堅を担う専任教員はほとんどいなかつた。考古学は専任二人を擁したが、東洋史、西洋史は皆無であつた。

林先生は日本史の古代、中世、近世、近代の各時代に二人の教員を配置する方針を立て、他の先生の同意をえて実現に努められたものと推測される。まず私よりも大学院で何年か先輩の小川信、米原正義両氏がそれぞれ高校、中学校の教壇から転じられ、ついで七三年、外務省外交史料館などにおられた馬場明氏、助手から非常勤講師になられていた二木謙一氏と私の三人が同時に専任講師に就いた。その後、大谷貞夫氏も着任された。これには大學全体の在学生数が増加し、財務状況が上向きになつたという背景があるが、今日に及ぶ史学科の順調な歩みのきっかけに限つては、林先生の尽力を抜きにしてはありえなかつたとして過言でない。

先生はその頃から大學の運営、行政にも大いに貢献された。

教授に就かれて間もなく文学部第二部長、さらに文学部長に選任された。佐藤謙三氏、吉川恭雄氏が学長の時であつた。その後も先生は大学院委員長、図書館長、北海道短期大学学長、学校法人國學院大學の理事などの要職を次々と歴任された。途中、別の法人の國學院大學栃木学園の栃木短期大学日本史学科の創設も委ねられ、カリキュラムの作成や人事などに色々と骨を折られた。また社会的活動として、渋谷区、江戸川区、横須賀市などの文化財保護、区市史の編纂にも長らく携わられた。NHK教育テレビの「くらしの歴史」の講師も長期にわたつて続けて、その功績によりNHK放送文化賞を受賞された。

一九七〇年代を迎える頃、国史学会は一時、例会が開かれず、『国史学』も休刊状態の時期が続いた。その後、再建された国史学会は史学科とともに歩み続けたが、林先生は率先して国史学会の発展に向けて絶えず熱心に助力して下さつた。古代史の例会の時には後々まで出席し続け、発表者に対して質問し研究の指針を示しておられた姿が印象深い。先生は一九九九年、小川、米原各氏の後を襲つて、国史学会会長となられた。大会での会長の挨拶のたびに、創設者で初代会長の三上参次氏の名を挙げ、学会の伝統を強調しておられた。二〇〇九年、『国史学』二〇〇号刊行に際して、委員長であつた私のコーディネートにより国史学会の歩みを振り返る座談会を

催し、林先生、山本信吉氏、二木謙一氏に語り合つて頂いた。国史学会は一言で表せば、長い年月の伝統、実績があるが、もともと史学科卒業生以外も参加するオープンな学会であり、活動内容においても史実の考証を重んじるとともに、自由闊達な気風が維持され、受け継がれてきた。その中心に林先生があった。

先生は八五歳前後から多少体調を崩されることがあり、会長の辞意をしばしば漏らされた。二〇一〇年六月、私はそのあとを承けることになり、二〇一七年六月まで務めた。

研究成果をまとめられた著書には、『光明皇后』（吉川弘文館〈人物叢書〉、一九六一年）、『上代政治社会の研究』（吉川弘文館、一九六九年）、『長岡京の謎』（新人物往来社、一九七二年）、『史実平将門』（新人物往来社、一九七五年）、『桓武朝論』（雄山閣出版、一九九四年）、『完訳注釈続日本紀』全七冊（現代思潮社、一九八五〜八九九年）、『長崎唐通事』（吉川弘文館、二〇〇〇年。長崎文献社、二〇一〇年〈増補版〉）、『奈良朝人物列伝』（思文閣出版、二〇一〇年）など多数ある。なかでも『続日本紀』の現代語訳、注釈は、前述した通り学部、大学院での講読の際のノートをもとにするが、今日、一個人の注釈書としては稀な業績である。そのほか、藤井貞文先生との共同監修の『藩史事典』（秋田書店、一九七六年）、私との共編『復元天平諸国正税帳』（現代思潮社、一九八五年）

などがある。後者は先生の大学院最初の受業生、山里純一氏をはじめとする卒業生、大学院生たちとの数年におよぶ正倉院文書の研究会の成果であった。

林隆朗先生は、先祖伝来の史料などによると、一六二三年、長崎領内平戸境竹島に渡来した唐人林時亮を初代とする長崎唐通事の家系の子孫であり、林家は明治初期に至るまで外交官を輩出している。先生はその第十一代に当たる。先生の手元には系譜を主とする家記の類があり、特に第二代林道栄は大通事として中国清との交流、交易に関わったが、書と詩文で知られた長崎の有名人であった。先に挙げた『長崎唐通事』は道栄関係の史料や長崎所在の墓誌をもとに、唐通事の職務、活動を介して唐通事の実態と性格、意義を論じられた著作であり、長崎の歴史、文化を語る名著として増補、復刻されている。

一九九六年、國學院大學退職に当たってお祝いの会を開いた。その記念に還暦の時に続いて受業生による論文集を編んで献呈した。ほかに私は酒寄雅志氏、私と同期で、福建省の事情に通じる旅行社の高橋俊和氏と相図って旅行券をお贈りし、林家の出た故地とみられる福建省の福清市港頭鎮前林村を探し当てて、ご夫妻で訪れて頂いた。同地は福州市に隣接し、旧の福清県化北里銭林に当たり、村では日本に赴いたと伝える林氏が二、三人いたことが分かった。帰国後、私などは

新築間もない世田谷のご自宅で、故郷訪問の大歓迎の様子が細かく撮影されたビデオを拝見した。その後、先生はご夫妻で日本華僑人学会にも参加されるようになったといわれる。

二〇一七年二月一八日朝、私はご子息文雄さんから先生が前日急逝されたとの報を受けた。すぐに酒寄氏、佐藤長門氏に連絡してご自宅を訪れて亡骸と対面し、ご遺族におくやみを述べた。林先生は二〇一五年、先の『長崎唐通事』をもとに身内のために平易に書き直した『長崎唐通事』を林家の歴史』を私家版で刊行されたことがある。書齋に入ると、窓側の机に岩橋先生のお写真のあるのが目に入ったが、真ん中に置かれたパソコンとプリンターのある机の上には、その私家版があり、傍らに近世の長崎に関する書物が開かれたままになっていた。逝去される四日前の状態であった。先生は最期まで林家の歴史の補訂に取りかかっておられたことを知った。実に研究一筋の生涯であったと感じ入ったのである。

奥様などのお話では、先生は近年、ご子息、ご令嬢の車で幼稚園以来馴染の中野教会に通う頻度が高くなり、また気に入られた賛美歌も多くなったところであったという。島田勝彦牧師は、先生が教会の設備などの改善についても積極的にご意見を述べておられたことを話された。ご葬儀では林先生ご愛唱のいくつかの賛美歌がご遺族や参集した大勢の方々によって何度も歌われた。心よりご冥福をお祈りする。

自由な学風と飾らないお人柄 — 林先生の訃報に接して —

佐藤 長門

林隆朗先生の訃報に接したのは、亡くなられた二月十七日の翌日にかかってきた鈴木靖民先生からの電話によってであった。電話では、鈴木先生と分担して林先生のご逝去を知り合いや教え子たちに知らせること、前夜式・告別式に先立って、弔問のため十九日の午前中にお宅を訪ねることなどを決めて、受話器を置いた。林先生と最後にお目にかかったのは、足を手術された先生が下北沢の病院にリハビリ入院されていた二年前、鈴木先生とお見舞いにかがったときであったが、入院されているとはいえ、以前と変わらない元気なご様子に安心した覚えがあり、また昨年五月に拙著『蘇我大臣家』をお贈りした際にも、一般向けにしては少々難しすぎるのではないかとのきびしい感想が書かれたお葉書をいただいていたので、電話を切ったあとも先生の死がなかなか信じられず、しばらく書斎の椅子に寄りかかったまま、次の行動に移ることができなかつた。

ご自宅への弔問には、鈴木先生と酒寄雅志先生、それに私